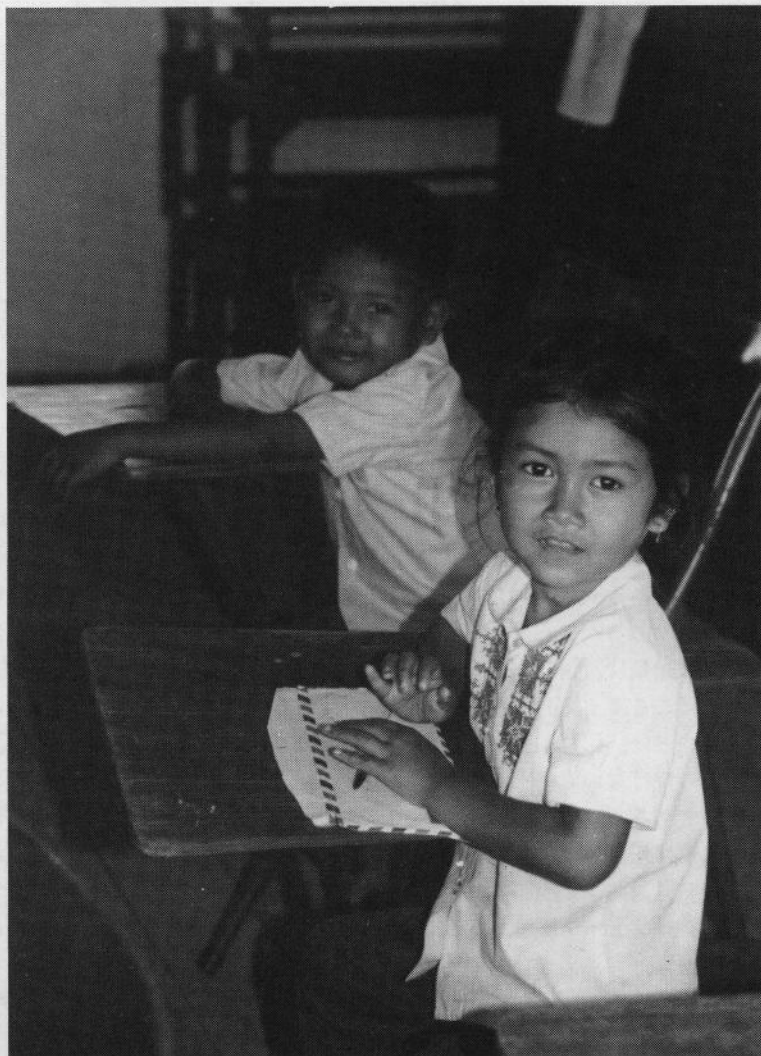


Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

No.53



タイ・レポート '85夏

変貌をとげるクrontイ・スラム	2
「難民」から「民」へ	5
パナニコムの新プロジェクト	6
日本語の生徒が「0」に	7
REFUGEES-ラオスの帰国民	8
自立するナイロビの都市難民	10
Dear, My Friend	12

変貌をとげるクロントイ・スラム

村田 恵子

(フリーライター)

進行するスラムの移転工事

1980年3月以来、JVCが活動を続けているタイのクロントイ・スラムが、この夏、大きく変貌をとげようとしている。以前から計画されていた移転問題が最終段階に入り、住民の大移動が始まりつつあるからだ。

今回の対象地区は、JVCのクロントイ・ボランティアホームやJVCの図書館や、プラティープ女史が創設した小学校があった第12地区で、約1000世帯、5000人が住む。もし、80年当時のクロントイ・スラムで一日でも過ごしたことがある人ならば、いや1年前の夏にでも訪れたことのある人ならば、私がこの7月に見たクロントイの光景は、信じがたいことだろう。事実、80年当時、ここで1カ月間活動したことがあるというTさんなどは、「呆然としてしまっ。知りあいのおばさんの家はないし……」とかなりショックを受けた様子である。

タイ政府の行った立退き移転工事は、まず71ライ（これは立地の面積を表わし、1ライは1.6km²にあたる）と呼ばれる平坦地をクロントイ・スラムの隣接地に用意することから始まった。その端に鉄筋コンクリート造りの小学校と特殊学校を建てた。小学校はすでに完成して、授業が始まっている。

整地された71ライには、道路と水道と排水路がとりつけられ、電柱を立て、配電工事がなされた。そしてスラムの中でも自力でこの71ライに引越せない142世帯の人々の為に、ブロック積み長屋風住宅が10棟建てられた。建築資材は、タイ財界からの寄付で、労働力はタイ国軍の無償労働であった。

一戸の広さは、日本風にいえばトイレ付、9畳1間というところか。全戸数ではないが、すでに入居がすすんでいる。もちろん無償提供である。しかし、これは住民の間に利益をうける層とうけられない層をつくりだして、新たな葛藤を生み出しているという

指摘もある。

ほかの人々も、政府から20年間の土地の無償使用を認められたが、自分たちの力によって、この71ライの土地に家を建てなければならない。

昔日のおもかげのないスラム

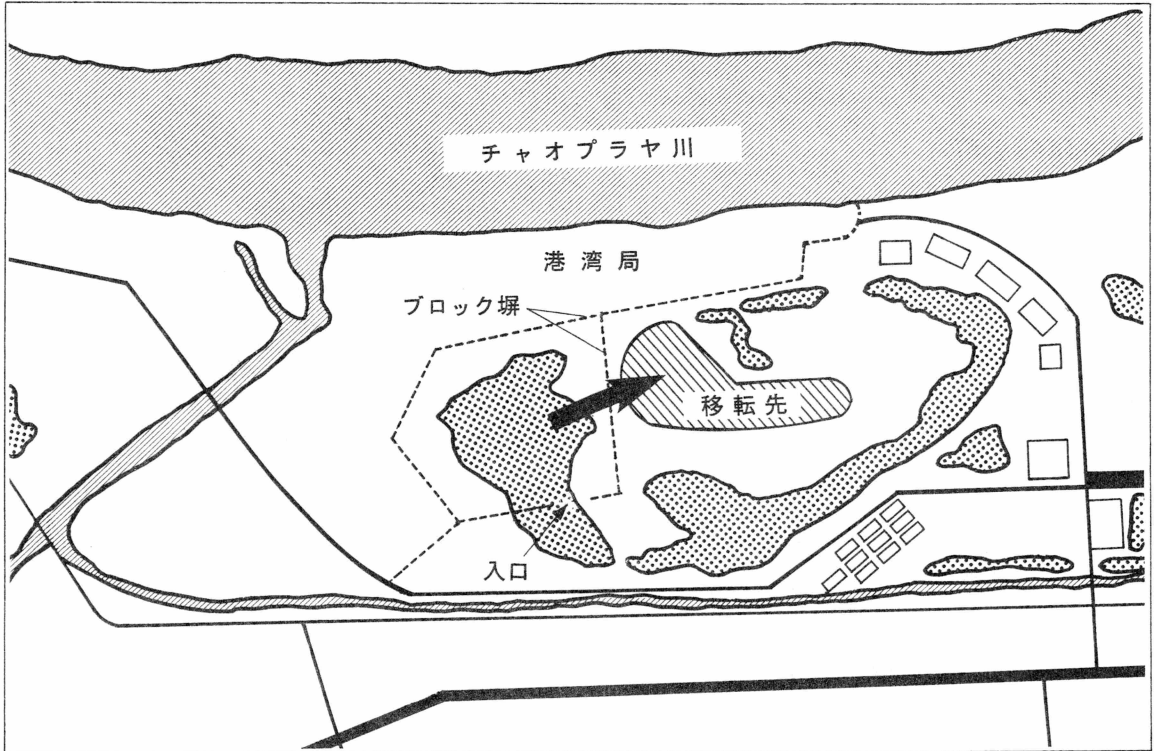
新しい小学校の二階から見たクロントイの風景は日本的な感覚から言えば、まさしく開発そのものだ。家々が建ちならぶ前の新興宅地造成地といってもいいだろう。少々せまいが白く光るコンクリートの道。その手前には大道路が一本とりつけてある。電柱や排水路、奥まったところに立ちならぶブロック積み長屋の屋根のむこうには、クロントイ港のクレーンが見える。そしてその宅地造成地の左端には、境界線のようにブロック塀が縦に走る。このブロック塀の内側が、以前のままのスラムなのである。JVCの建てた図書館は、このブロック塀建設の為にまずこわされたと思われる。とりこわされた跡地には古い材木やトタン板などが野積みされていた。

つまり、このブロック塀の内側にあったスラムが、自力でこのスラムから出ていく人を除いて、右手の



長屋の屋根のむこうに港のクレーンが見える

クロントイ・スラムの全景



宅地造成地に移り、跡地には、港湾施設が拡張してくるというわけである。民間ボランティア団体は、JVCのみならず現在のところこの移転を静観しているという。これは、低所得者向け住宅の建設などタイ政府が先取りをしていることや、スラムの住民委員会がこの移転を住民にとって有利なものと考えていることからきていると思われる。

しかし、この宅地造成地に日本のようにピカピカの家々が建つとは思われない。クロントイ名物の板きれの路地は消えるかもしれないが、ゴミや汚水はうまく処理されるであろうか。そして人々の住環境は向上するであろうか。低所得者用の長屋に移ったある母子家庭のおばさんは、「電線はきているんだけど、うちまで引き込む金がないし、入れても電気代が払えないからねえ」とため息をついていた。

スラムが移転すれば問題は解決するのか？

現在この71ライのほぼ中央に、赤い屋根のピー（お堂）が建てられている。このあたりがコミュニティセンター用地になるはずだが、まだ公式発表はない。JVCの図書館は、今は新しい小学校の近くの青少年センターという木造二階建ての建物の一階を借りて活動をしている。しかし、将来は、このコミュニ

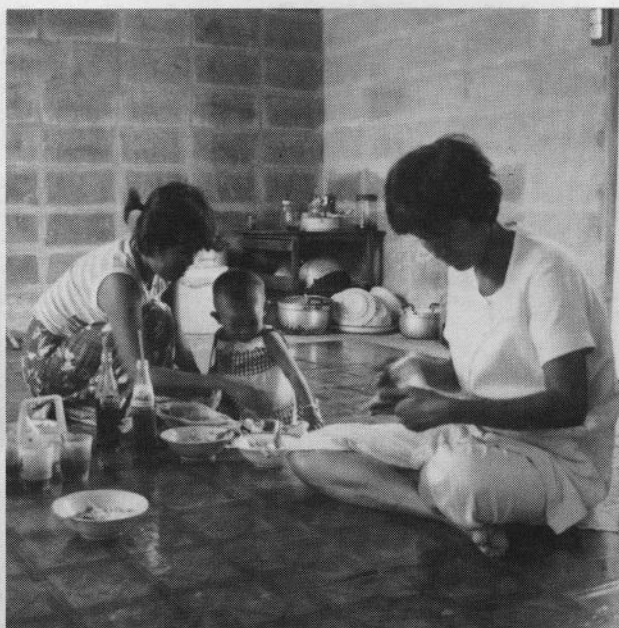
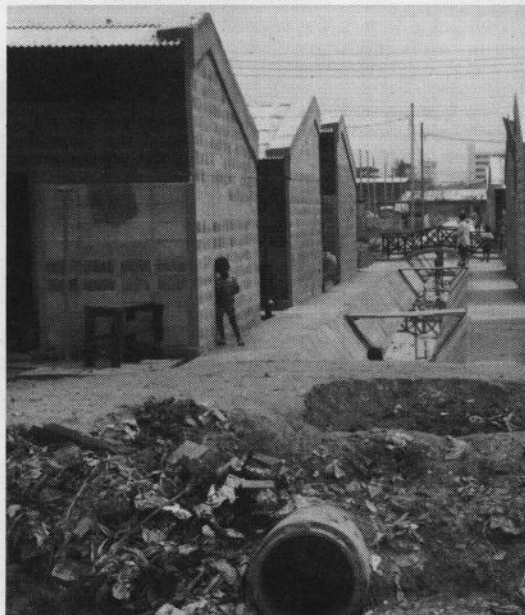
ティセンターの内部か隣接した場所に再び図書館スペースを確保したいとJVCのクロントイ担当者加藤氏は考えている。運河わきのスラムが、洪水予防の浚渫を理由に、市内から車で数十分離れた土地に移されたり、市内のスラムが、バンコク国際空港近くに移されたりしているという。

今年、初めてJVCが12人の子どもに奨学金を援助したオ・ヌーのスラムも、もとはといえば、ディンデンという昔のゴミ焼却場の近くにあったスラムが、焼却場とともに移ってきたものである。彼らは、腐臭漂うゴミの山からビニール袋やビンや故紙をとりだす仕事を失わないために移ったのだが。

このように各地で始まったスラムの立退きや移転は、タイ政府が自らの手でスラム問題になんらかの決着をつけようと試みているともいえる。特にクロントイの立退き移転は、世界的にも有名になったクロントイなるがゆえに、タイ政府の「スラム立退きモデル地区」ともいべき力を入れた取り扱いである。

しかし、はたしてこの実験が成功するかどうか。この点において、またしてもクロントイ・スラムは私たちの関心を引き続けることになるであろう。

ブロックに建て直された家々



新しい家の内部。9畳ほどある

タイ・バンコク・クロントイ

クロントイはタイ第一の貿易港で、タイの輸出入の98%を取り扱っているといわれる。といっても、タイランド（シャム）湾に面した海港ではなく、チャオプラヤ（メナム）川下流の河川港である。河口から直線距離にして約20km、川筋に沿って遡行すれば約30km、バンコクの旧市街のはずれに位置している。

タイ内陸部で生産されたタピオカ、メイズ、米、原糖などの農産物も、トラックなどでバンコクに集荷され、この港から輸出されている。しかし、常時、浚渫（しゅんせつ）しても、1万トン級の船舶が限界であるため、遠方へ輸出する場合は、シンガポールなどで大型船に積みかえることが多い。

さてバンコクには、ご存じのとおり、タイの総人口の10%以上が集中し、しかも、1人当たりの所得は他地域の2.5倍といわれる。この数字を単純に積算しても、タイの総需要の2～3

割が集中していることになる。そのうえ、車、電気製品など金持ちが買う品物、言葉を替えれば、工業製品の国内需要は半分以上が、バンコクにあるということである。

需要地の近くに工場を作るという近代工業の大原則に従い、バンコク、およびその周辺に工場が建てられ、働く人が流れこみ、その人たちをあてにした……、という循環で、バンコクの市街地はここ数十年、急激に広がっている。

旧市街のはずれにあったクロントイも、現在の「大バンコク」では中心部に位置するようになった。以前は首都の郊外にあった、低所得者の住宅地域が、今や一等地になったわけである。

当然のことながら、土地の有効利用という声があがる。また首都の玄関に近いゆえに、対外的に有名になり、それを憂う声もある。そういった背景もあって、タイ政府は「クロントイスラムの改善」に本腰をいれているようである。

「難民」から「民」へ

——山本敏幸さん——



左から山本さん、チュンさん、プラティープさん

山本敏幸さんについてはJVCの古いメンバーならほとんどの人が覚えていると思う。1980年にJVCができる前からタイにいて、私たちがバンコクにやってきた時には既に事務を執っていたという人である。現在はJVCの一線から身を引き、「戦場に架ける橋」にほど近いカンチャナブリにある「子供村学園」で工作指導の先生をしている。機織りの先生をしているチュンさんという若くてかわいらしい伴侶も得た。

山本さんの帰国は3年半ぶりという。今回の目的は奥さんの入籍手続きをすることと、「子供村学園」の広報、特に子供たちのスポンサー（里親）をみつけることであった。「子供村学園」というのはタイの福祉団体である「子供財団」が経営している全寮制の小学校で、貧困に加え親の保護が得られない子供たち80人が生活している。学園は学校であると同時に共同体でもあり、農作業や機織りもカリキュラムに含まれる。またタイプの習得や自動車修理など職業訓練まである。ところがこの学園ではそれらの勉強を決して強制しない。遊びたければいつまでも遊んでいてもいいと、子供たちにとっては天国のような所だ。しかしその子供たちもこの天国に至るまではそれぞれ地獄を体験してきているので、中には情緒不安定な子供もいるという。そういう子供たちが自ら困難を克服し、成長していくのを待つというのだから担当の教師たるものかなりの技量を要求される。やみくもに自分の思いどおりに子供たちを引っぱっていかうとしても彼らは決してついてはこない。

こういう話を聞くものは、いくら勉強する気になるまで待つといっても字ぐらいは卒業するまでに書けた方がいいのではないかと思う。そして、やはりここでも試験はある。試験に落ちればもう一度同じ学年をやりなおす。甘やかすはないという。

山本さんがこの学園の先生になってからまだ1年半しか経っていない。JVCのスタッフをやめてからはタイ語の勉強をしたり、お坊さんになったりしていた。お坊さんになったのは燃える求道心からというものではなかったようだ。タイの人の心を知り、もっとタイの人に近づきたかったからだったという。山本さんがインドネシアにいたらモスクに通

っていたかもしれない。

山本さんはもう10年以上も世界中を歩き回ってきた。とうとうタイに腰を落ちつけることになった。その間ずっと“自由に”農業できる土地を探し求めていたという。だから今も農民になる夢を捨てていない。チュンさんも外国人である山本さんと結婚したためタイで土地を買うことができなくなったが、土地を所有することには意味がないと山本さんはいふ。自然とともに生き、あくせくせず、心豊かに暮らすためには土地を持っていようがいまいが関係ない。確かに私たち日本人は土地の所有ということに関しては異常かもしれない。猫の額ほどの土地でも自分のものであれば心落ちつくというのは、私たちにとって土地が金銭的な価値以上のものを持っているからなのだろう。

山本さんは一貫して人と人のつながりを大切にしてきた。「どんなに風俗、習慣、考え方に差異があっても、その人を想い、その人を大切にしたいという気持ちがあれば必ず通じます」。今までの経験に裏打ちされた言葉である。山本さんはJVCに入って初めて「難民」を知ったという。難民は自分がふれあった人々の一部にすぎない。難民と呼ばれる人々も元は「難」などという文字はなかった。ただその土地に住む人々だったのに、国境ができ、自由がなくなったので、逃げ出したら難民になっていた。私たちにも「難」を取った「民」にも心を傾けてはどうかという。私たちの救援活動は難民から始まったのだが、これからは「民」についても考えてみたい。

3年の歳月は山本さんを見守るやさしい先生にしていた。——山本さんの呼びかけに答え、子供たちのスポンサーになって下さる方は下記の送り先までご送金下さい。“里子”となった子供たちの現状報告書等をお送りします。6カ月毎に区切り、1口3万円(A)、1万5000円(B)、7500円(C)とあります。詳しくは連絡員にお問い合わせ下さい。

送金先 郵便口座番号：東京 3-36211

口座名：三好浩一（子供村学園スポンサー
シップ基金）

連絡員 三好浩一 〒165 東京都中野区新井 3-25-6

パナニコムの新プロジェクト

落合正幸

(元パナニコム日本語学校
コーディネーター)

日本語学校の転機

パナニコム日本語学校は、ある意味で転機を迎えています。それは単に日本語授業からオリエンテーションプログラムへの変換ということだけではありません。今回は現在のパナニコム日本語学校と、そこで活躍するメンバーが今何を考えて新たなプロジェクトを進めているのか、それを報告したいと思います。

日本語学校は、今年の3月に第16期授業で一応の形として終了し、4月より新規プロジェクトに移りました。その中で私たちは何をすべきなのか、日本語学校の意義、そこで学ぶ難民とは、そこで教える教師とは、キャンプの生活とは、などを再確認せざるを得ませんでした。しかしインドシナ難民問題が始まって10年。戦争という人間の歴史そのものといっても過言ではないこの問題をなかなか明確にできるものではありません。毎晩話し合いに次ぐ話し合いで夜が更けてゆきました。

プロジェクト変換に至った背景についてですが、これまでの日本語授業には不確実ながら3カ月ごとのサイクルがあり、授業内容もそれを目安に考慮されていました。また週一度のオリエンテーションで



日本語学校の前で。中央が筆者

は日本の紹介、出国までの方法、飛行機内での諸注意、大和定住センターでの生活など彼らに必要と思われる情報を限られた時間の中で提供してきました。しかし最近になって日本への定住者の移動が特に激しくなり、早い家族は2週間程度しかパナニコムに滞在せずに日本へ送られてしまいます。こうした中で日本語の授業を継続していくことが難しくなっていたのです。

曖昧な授業をしてはならない

パナニコム日本語学校で生徒たちはひらがな、カタカナ、日常会話の基礎等を卒業までに学べます。プロジェクト変換前の鈴木コーディネーター、新プロジェクトの浜崎コーディネーターが共通して語ったことは、「決して曖昧な授業をしてはならない」ということです。現状の中で日本語授業を続けても生徒たちは修得できないままキャンプを出て行きます。キャンプの中はすべて曖昧できています。生活も、仕事も、自分自身も。確実なものがとても少ないのです。キャンプ内の規則も金銭で自由にできます。日本への出国もいつなのか、また行けるのか行けないのかさえわかりません。事実3年近く日本政府の許可が出ないためにパナニコムキャンプで日本定住を待ち続ける家族がいます。そんな彼らの不安に対し私たちは非力です。「きっと日本へ行けるよ」その一言がいえないために私たちは苦悶します。一見思いやりのように聞こえるこの安易な一言が、彼らを行けなくなったとき、より深く絶望させるのです。それがキャンプです。そして私たちが日本人だということです。

今パナニコム日本語学校では日本定住に関するオリエンテーションと、その中に組みこまれている日常会話の練習を行っています。そして日本語の本格的な学習は、大和定住センターへ送られてからということになります。

しかしオリエンテーションに移っても決して曖昧な授業をしないという考えは変わりません。たとえ彼らが置かれた状況がどんなに不確実で、不安なものであったとしても、日本語学校で授業を受けている時だけは、決して曖昧という文字はないのです。

日本語の生徒が「0」に

浜崎 妙子

(パナニコム日本語学校教師、
コーディネーター)

この3カ月間、パナニコムに移動してくる難民はカオイダンからのみと言いきってしまうほど一方的である。他のキャンプからの移動はまるで止まっている。キャンプ人口も1万721人(7月末日)と少ない。クメール人7000人に対しラオス人700人と十分の一である。これはバン・ナポーキャンプからのラオス人の移動が長期に渡り止まっているからである。日本語学校の生徒の到着も2カ月遅れている。各団体ともラオス人の到着を待っている状態である。

7月末に3家族、15人が日本へ出発する予定だったが2家族は出発が8月になってしまった。彼らは8月7日バンコクへ移動し、多分8月中旬には日本へ出発するだろう。そしてこの15人が出発してしまうとパナニコムは事実上生徒は「0」になる。日本政府による「日本定住許可予定者」はバン・ナポー—120人、カオイダン—50人、シキュー—1人とリストアップされているのだが、今だに正式な「定住許可」が降りていない。そんな中で先月から始まった「内務省月例会」においてはショックな発表がなされた。11月以降、すべての団体に「内務省」の担当官を配属するというも

のである。元来キャンプの責任は内務省が持っていたが各団体の日常にまで入り込むものではなかった。いわばすべてが内務省の管轄下に置かれるということである。このことが何を意味し、タイの難民政策がどのような方向に動こうとしているのか今はわからない。

私たちはやがて来る生徒たちのためにより充実した形で学校を守りぬかなければならないと思っている。そこで次期生徒が到着するまでプログレッシング・センターで待機する難民に対して図書館の開放、日本を紹介するフィルムによる文化オリエンテーションを考えている。以前から「日本に受け入れを断われたが、日本語の勉強をしたい」と訪ねてくる者も少なくない。一時的にではなく新しいパナニコムの可能性として我々は考えている。今ここで以前と変わらぬ方法しか取らなければ、内務省のジレンマはますます強くなるだろう。キャンプ内のミーティングでも各団体は「どんな活動の可能性があるか」に話題は集中した。コンソーシアム^注は2日の間に次期生800人の移動を内務省から突然にされた。いろいろと移動させない方向に圧力をかけたが内務省は実行に移した。今パナニコムでは大きく何か動きだしている。

このことはパナニコムだけの問題ではないように思う。1人ひとりのJVCのスタッフと一緒に考えてほしいと願っている。

8月末ナポーより90人が一度に到着する予定だ。しかしパナニコムの基本的な問題点は変わらない。
(タイの月例報告より)

注) 各救援機関の連合体

わたしたちが考えていかなければならないこと

難民たちは定住の不安とともに日本を恰も夢の国の様な印象で捉えがちです。しかし彼らを待つ日本の現状は夢どころか非常に厳しい生活です。もう食料の配給もないし、家も与えてもらえません。日本の富士山を紹介するのも決して誤りではありませんが、新規オリエンテーションでは彼らと私たちがほんとうに考えて行かなければならないことが何であるか、それを真剣に直視します。新プロジェクトのチームリーダー、浜崎さんの言葉です。「もちろん今まで歴代のリーダーたち、そしてたくさんのメンバーたちが、同じことを考えてきたでしょう。新プロジェクトもそれをなお発展させて考えてゆかねば

なりません」。

新しい日本語学校は、JALなどの協力により、飛行機の機内セットやビデオ学習など機能、内容とも諸外国のボランティア団体に並んで水準の高いものになっています。パナニコムは定住難民と日本人との最初の出合いの場といってもいいでしょう。彼らはここで日本での生活、キャンプの外で生きることの意味を考えなければなりません。そして私たちは彼らと“ともに生きる”ことの意味を考えます。日本に定住難民が送られる限り日本語学校はこの問題に真剣に取り組んでいかなければなりません。最後になりましたが、活躍中のメンバーに心から激励を贈ります。



ラオスの帰国民

バット・マット村に帰る

ラオス難民はタイで UNHCR が援助している難民の中で、最も数が多く（13万人中、8万6000人）、また唯一増加傾向にある難民グループである（昨年中に25%増加）。その一方、現行の UNHCR の援助計画のもとで自発的に帰国できるのもラオス難民だけである。

1980年以来、約2700人のラオス難民がタイから故国に自発的に帰っていった。彼らには帰国した先で UNHCR から「生活再建セット」（米を含む）が提供された。国連によると手配には関係なく自力で帰郷した者の数は4倍以上になると推定されている。帰国した難民は大半が農民であり、たいてい出身の村に戻っていった。

帰国後の生活で問題を抱えている帰国民について UNHCR に知らせてくるのは政府である。かつてのラオス王国の首都ルアン・プラバンの北東40キロのところに住む山岳民族のヤオ族の帰国民を UNHCR が援助するようになったのは、このような政府の通知を受けたからであった。1978年にこのヤオ族は国境を越えてタイ国内のナン県に行き、バンナムヤオの難民キャンプの外で非合法に定住しようとした。このようにキャンプ外に住みつ়く人々のことを、タイでは「自由生活者」と呼んだ。呼び名の聞こえはいいが、比較的自由的な行動を取ったために彼らが支払った代価は大きかった。食糧はわずかで、不法入国者として逮捕される危険性もあった。このヤオ族のグループは、タイでの生活があまりに厳しかったため、1979年から80年にかけて、ラオスへ戻り始めた。

最初、彼らはルアン・プラバンとサヤ・ブーリなどの地方都市を結ぶ街道筋のバン・パニップという場所に落ち着こうとした。この時、UNHCR から毛布、農器具、家具などの援助を受けたが、試みは失敗に終わった。耕作に適する土地が十分ではなかつ



たためだ。

その地方の行政責任者はヤオ族に、さらに北へ行き、ルアン・プラバンの北東を流れるウー河のほとりにあるハット・マット村へ住むように勧めた。村には最終的には100家族のヤオ族が移住するものとみられる。現地にはすでに30家族が到着し、UNHCR から供与された援助（トラクター2台、家畜、数キロ先の水源から引いた水道、大工道具、鍛冶道具、ミシン数台など）を十分に活用している。今年の後半には教室が5つある学校と診療所が建てられることになっている。

山岳部族であるヤオ族には漁をする習慣はない。けれども、ハット・マット村ではすでに魚を焼いて食べている。隣のラオ人の村から魚を手に入れるのだ。近く UNHCR では、ヤオ族に舟と網を供与する予定である。

ハット・マット村のヤオ族の指導者であるルアン・タは、自分の一族が生活を再建するのに十分な援助を与えられて非常にうれしい、といっている。ハット・マットプロジェクトの映画を撮るために派遣された UNHCR の撮映チームに、ルアン・タは村の新生活を熱心に紹介するのだった。この映画の目的は、まだタイに残っているラオス人難民に対し、もし帰国すれば、どんな援助を受けられるか、どんな生活を送れるか、をアピールすることである。

低地ラオス難民もこの映画を見るであろう。しかし、彼らはむしろ、タイのノンカイからメコン河を越えた所にあるダ・デア地方に入植した彼らと人種的に同じ帰還者の生活に関する部分に、より大きな関心を寄せるであろう。

帰国を呼びかけるラオス政府

ダ・デウア地方の帰国民は似たような話をよくする。ノンカイに難民キャンプがあった時には、全員ではないにせよ多くの者たちが好奇心からタイに出かけて行った。アメリカやフランスその他の国に定住できるかもしれないと思ったのだ。ノンカイのキャンプ自体が相当に魅力的であった。

タイ政府は1984年の9月にノンカイ・キャンプを閉鎖し、ラオス難民をナホン・パノムの“人間抑止”キャンプへ移したが、その状況はさらに厳しいものであった。前途が苛酷であることを知って、何百人もの難民がナホン・パノムへ移されるよりはラオスに帰国することを選んだ。多くの者は自力で帰って行った。ダ・デウアの近くでは初めおよそ400人がタイへ逃れたとされているが、そのうち約200人が帰国している。彼らはラオス政府に暖かく迎えられたと言っており、また政府の側でも、「もっと多くの難民に帰ってきてほしい」と話している。

ビエンチャンの公務員であるシブーン・ポリブーン氏は「もしタイにいるラオス難民に直接話かけるとすれば、ラオスの国籍と伝統を捨てず、祖国に帰ってきてほしい、といいます」「悪い意図を持っていない限り誰でも歓迎します。帰国民が再教育キャンプへ送られるというのは全くのデマです」といっている。

もうひとりのビエンチャン地方公務員であるハムシン・ホサナボングサ氏は、ラオス政府は都市に住んでいる帰国民の雇用確保のために努力している、といっている。「わたしたちが提供できるものは限



ラオス難民の家族

られています、できる限りのことをしています」と、彼はいう。UNHCRは帰国民の中の若者を対象に特別な建設プロジェクトを計画している。職業訓練のための奨学金も近く準備される予定である。

故国のラオスよりも生活水準が高い第三国に定住できるかもしれないという可能性が残っている間は帰国に関心をみせるラオス難民はあまり多くない。1975年以来、タイに逃れた30万5000人に上るラオス人のわずか5%以下にすぎない。

しかしながら、今なおタイ国内のキャンプに残留している多くのラオス人にとって結局は、自発的意志に基づく帰国が唯一の解決策となるであろう。その理由は二つある。第一に、タイ政府は「難民が自国内に無期限に滞留することは許されない」といっていること。第二に、第三国定住の受け入れ国が従来ほど難民を受け入れなくなっていることである。1984年に新たにタイに流入した難民2万人に新生児4000人を加えてラオス難民の合計が8万6000人に達したという事実に対して、第三国へ出国したラオス難民の数は9000人にすぎないのである。

中国 高い難民の出生率

中国に定住したベトナム難民のほとんどは子供が8人から10人もいる。これは中国政府が推進している「1夫婦に子供1人」という原則に真っ向から反対するため、政府筋は深く憂慮している。

中国では1973年以来人口抑制政策を推し進めてきたが、この政策を受け入れているベトナム難民はごく一部で、1978年以来2万2000人も新生児が彼らの間に生まれた。ベトナム人にとって子供は多ければ多いほど良く、中国の政策になかなか順応できない。また中国政府も彼らに対し比較的柔軟な姿勢をとってきており、他の少数民族と同じような扱いをしているので積極的に産児制限しようとはしない。

もちろん難民側も産児制限を実行すれば中国国民と同じ特典にあずかることができる。避妊に関するものは無料であるし、子供も14歳まで医療手当が支給される。

この中で若い夫婦や中国人と結婚した難民たちには産児制限を受け入れる者も出てきた。特に中国人と結婚した人々は産児制限の必要性を感じている。今日、難民と中国人の結婚は何百例にもなっている。

自立するナイロビの都市難民

佐倉 洋

(ジャーナリスト)

ケニアのナイロビの下町。道路には、バスやトラック、それにマタトゥーという乗合自動車があふれている。歩道には、露天商が櫛やボールペンを並べている。街角には失業中の青年がいつもたむろしている。ケニアの難民事務所^{注)}はそんな一角にある。狭い玄関を入ると鉄格子の扉がある。各階の入口にも鉄格子。ガードマンが一人ひとりをチェックする。難民との間のトラブルで負傷者が出たことがあった。その後当局が設置したのである。

国連はこの難民事務所を通じて、難民個人へ生活保護的支給金や学費の援助をしている。月曜にはエチオピア難民、火曜にはナミビアというように、国別に指定された曜日に難民はこの事務所にやってくる。ケニアの登録難民は約7000人(未登録難民はこの数倍いるのだろうか、実数はわからない)。規定上は、ケニアに到着して最初の6カ月間、国連から1カ月に1人300シリング(1シリング≒15円)が支給される。その後は自分で仕事を探さねばならない(ただし老人や病人には給付が続けられる)。医者や法律家には仕事がある。その他の人々は、学校の先生になったり、国連から融資を受けて事業を始める。しかしそれでもできない難民は仕事が得にくくなっている。ケニア政府が外国人を排除し始めてから、日に180円ほどもらえた土方仕事も最近ではなくなった。

そんなことで不満が時々爆発する。支給が遅れたりするとトラブルが絶えない。国連の難民事務所に座り込み、アフィリエ代表(ガーナ人)の車をストップさせたこともある。大家族を抱え、仕事がなかったからというのが理由である。代表はこのとき警察を呼んで排除したが、翌日彼らを保釈し、部屋をあてがっていた。

自立の試みを始める

1983年3月31日上智大学難民調査団がケニアを訪れた際、このナイロビの難民と会議が行われた。その後難民側でも自主的な活動が続けられ、改めて国連主催で同様な会議が開かれた。さらにカトリックのマリア会でもエチオピア難民を中心に積極的な支援活動が始められた。アメリカの黒人デービス師がこの担当となった。

1984年になり、難民自身で団体を作ろうという動きが出た。学生中心のサークルからより強固なものへ改変しようというものだった。初めての会合に、約50人の難民が集まった。ウガンダ、エチオピア、モザンビーク、ナミビア、ルワンダ、そしてザイールからも1人の難民が来た。これまで国別の難民グループはあった。それは政治的立場や宗教の違いで細分化していた。国際的な組織ができればアフリカでは初めてのものになるだろう。真に難民全体の意志を反映しているかという問題はある。委員長には、圧倒的多数の支持でウガンダ人イスラエル・マエング氏が選ばれた。彼はウガンダの元政治家で、ナイロビで木工所を経営している。会の名称はRSR(Refugee for Self Reliance 難民自立)となった。憲章も作ることにした。マエング氏の同級生がケニアの司法長官をしていたこともあり、ケニア政府の認可取得には、彼はそのときは楽観的だった。

翌週、実行委員会のメンバーは、国連代表とケニア事務所にあいさつに行った。事務所の代表ガシルワ女史はあいさつした後、私に難民とケニア側のコーディネーターになってほしいと頼んだ。我々は希望に燃えていたが、事態はそんな甘いものでないことがわかった。ガシルワ女史は難民側が強力なのでとまどっていたようだと言す難民もいた。やがてケニア事務所も独自に難民組織を作った。面白いことには、各国からの代表が我々のグループと重複しているケースがあった。結果はRSRは政府から認可されなかった。ケニアとウガンダの政治的関係が改善された今、元政治家を代表に選んだことは失敗だった。ちまたでは新しいOAUを企図しているのでは、というあらぬ疑いをかける者さえもいた。

政治の谷間で緊張から精神不安に陥った難民

ケニアとウガンダの関係安定は逆に難民の立場を悪くした。特にウガンダとルワンダ難民たちは、緊張した状態におかれるようになった。亡命中のウガンダの元大物政治家が白昼秘密警察の手によって連れ去られるという事件があってから学生にも不安が広がった。誰かが命をねらっていると、連れ去ろうとしているとか公言する者が多く出た。中には幻聴が高じて半狂乱になってしまう者もいた。ラジ

オが危険を知らせる警告を発するのだと四六時中放送を聞いている者もいた。

私はそういった難民を国連の担当医にもなっているケニア人医師ベティ氏のところに連れて行った。ドクターは巧みに「この薬は解毒剤」と言って薬の常用を納得させた。素直に指示に従う者は良かった。しかし「医者金はもうけが目的だ」とか、「精神病院は人格を抹殺する所だ」ときめつける難民は症状を悪化させた。



それでも難民は自立のためのプロジェクトを始めた

政治的には極めて厳しい状況におかれた難民であるが、個々にその技能を生かし、自立しようとしている者もいる。国連は側面から援助するための融資を行っている。

ルウェンゾリ・オートガレージのルトベガさん(39歳)。ウガンダから来た。家族は9人。ウガンダ在住の64-70年に、政府派遣でモスクワに自動車機械の技術研修に行き、72年にはイタリアにも行って、技術には自信があった。

仲間とナイロビの下町の外れに土地を購入し、自動車修理作業場を始めることにした。国連から84年、1期分として4万5000シリング(約70万円)を借りた。これを土地借入金やフェンス代に充て、道具も購入した。同じ年2期分として2万シリングを借り、電気関係の設備費に使った。ウガンダ人技術者(難民)も雇い、1月2000~4000シリング(3~5万円)払っている。競争はあるが、一流の技術をバックに注文も増えている。

カベテ・トウモロコシ製粉所のカブゴさん(45歳)。81年にケニアに来た当時、なけなしの資金5000シリング(約8万円)をはたいて、奥さんとキオスク(小さな木造の食堂)を始めた。83年に国連から6万5000シリング(約100万円)、84年に2万3000シリングの融資を受け、製粉所を始めることにした。

このカベテの場所を選ぶにあたっては、市場調査のためナイロビ周辺を歩き回った。ウガンダでもこの仕事をやっている綿密な事前調査が成功の秘けつであることを知っていたからだ。今では店の前に長い行列ができるくらい繁盛している(ケニア人はパックに入ったトウモロコシ粉は好まない。田舎から持ってきたり、豆で買ったトウモロコシを、必要に応じて製粉するのである)。ウガンダ人難民を3人雇った。月600シリング(約1万2000円)払っている。ケニアでの最低賃金であるが、国連の支給金1家族500シリングよりも良い。

ロデオ・テレシステムのビナイサさん(35歳)。彼はウガンダの電話公社に勤めていた73-74年、日本に研修に来たことがある。アミン時代にも難民になりオボテ政権で再度難民になった。日本時代の研修費を貯めていたのを財源として、ケニア人の友人とナイロビに会社を設立した。電話機の製造と修理の会社である。部品をスペインやイギリスで買い込み、年間3000台ほど作っている。作業場はナイロビ市内のビルの地下にある。スタッフには難民のウガンダ人1人のほか、ケニア人やタンザニア人がある。日本と提携を結んでその注文に応じられる規模にし、難民をもっと雇いたいというのが彼の夢だ。

ムナークカマ・カンパニーのシルバー・キインバさん(30歳)。ムナークカマとは、貧しい者が力を合わせるという意味。彼はウガンダで木材関係の仕事をしていた。もともとは神父になろうと思っていた。神学生のとときイタリアに留学したこともある。難民となってケニアに来たとき、「受け入れセンター」で会った数人の仲間とともに、難民の状況改善のために力を合わせることを誓い合った。

そして、83年国連から借りた1万3000シリング(20万円)を元手に、作業場を手に入れ、ケニアでは珍しい樹皮製の財布や土びん敷きといったウガンダの民芸品やTシャツのスクリーンプリントを始めた。デザインは彼のオリジナル。従業員は女性を含むウガンダ人、ルワンダ人の8人。注文が続くかどうかで、欧米の知り合いに手紙を書き、販路の確保に努めている。85年中にはパークリー銀行からの融資も受けられそうだ。日本にも是非販路を確保したいと望んでいる。

(この文章は7月27日のウガンダのクーデターの前に書かれたものです)

注) プロテスタントとカトリックの教会から構成され、政府も職員を派遣している。

Dear, My Friend

(原稿、お待ちしております。1000字ぐらい。)

「トイレ物語」

石井 清美

発展途上国においては環境衛生について話す時、必ずトイレの話題がでてくる。エチオピア医療援助プロジェクトに参加し、活動を終え、アディス・アベバに出て来た時、あるボランティア組織が主催するセミナーに参加した。そこで、ある公衆衛生学の教授が次のような話をしていた。

「旧約聖書の中に、モーゼという人がイスラエルの民を引きいて、エジプトから脱出したことについて書かれているが、何万人もの人々が、何日もかけて旅をするわけであるから、当然トイレの問題がでてくる。この時、モーゼは人々に、『用を足す時は穴を掘り、終わったら土をかけておくこと。あちこちに用を足した跡があるような所には神様は来られない』と、人々を指導したそうだ。モーゼは素晴らしい公衆衛生指導員であった。

何千年も前のモーゼの時代に人々ができたことがどうして今のエチオピアでできないのだろう。エチオピアでは町を離れると、トイレはない。人々は、木蔭や草むら、窪地のような所で用を足す。

ある日本人がエチオピアに着いてしばらくして田舎道を車で走っていたら、腹痛に襲われトイレに行きたくなった。日本人の考えとして家があればトイレがあると頭の中で結びつくため、その人は家が見つかるまで腹痛を我慢した。やっと見つけた家に行きつて覚えたてのアムハラ語で「トイレ」という単語を何回も言ってみたが人々は家の外を指さすのみであった。最初、それが何を意味するのかわからなかったが、やっと、「トイレはない。その辺で用を足せばよい」という意味だとわかり、家から少し離れた所で事を終えたわけであるが、その間に周りから人が集まり、見物されていた、ということだ。

エチオピアの我々の病院の患者の半数以上は下痢性疾患である。そのすべての原因がトイレがないためだとは言えないが、割合は大きい。トイレの普及しない原因としては衛生教育の不足がまず考えられ

るが、私が考えたのは、「エチオピア人はトイレを作ること、大げさに考え過ぎているのではないだろうか」ということだ。我々の病院のトイレを作っていた時何回か見に行ったが、深さは2メートルもあり、穴の中四方を石垣で囲み、穴の上には、すき間なく木を並べ、その上に小石を並べ、その上にセメントをしく、という作り方で非常に頑丈に出来ている。おそらく病院全体の建物の中で、トイレが一番頑丈に出来ているだろう。病院のトイレだから特別なのかと思ったが、近くにあった農業組合が作ったモデル・ハウスのトイレも同じように作っていた。どんな安ホテルのトイレも、皆きちんとしたものだった。

あのようなトイレを一般の農民に作るように教えるのも無理なことだ。何しろ家を作るのがやっとなぐらいの材料しか周囲にはないのだから。何か、もっと簡単に、その土地で手に入る物を使ってトイレを作る方法はないものかと思う。

「JAST, 僕らの時代」

井本 勝幸

こんにちは！ JASTです！ 僕は東京農業大学の学生です。この度、うちの大学の学生連中と共に、JVCにSHAREのような農業チームを創ろうという運びになり、JVC Agricultural Supplyment Team（略してJAST）と名づけ、今、JVCで色々勉強中です。将来は、コーディネーター兼農業技術者、あるいは栄養士として自立してゆこうと考えています。

メンバーはただ今10名ほどで、1984年にソマリアで3カ月間農業プロジェクトに参加した私、井本と、世界が飢えていることに、冗談じゃないと燃える男、五十嵐君。酒と農作業には不死身の体力を持つ、畑の大将、船川君。アメリカン・フットボールで鍛えた執印君。アフリカの部族にやたらと詳しい苗代君、難民にうんと栄養のある野菜を、とがんばる森住さん。難民を抱きしめたいという山口さん。砂漠に緑をと燃える研究者、押木君。一人でも生き

てゆける石塚君。JVC大好きの日向野さん。と、結構おもしろい人間が集まっています。来年(1986年)には、計画として、春季に5名(五十嵐、執印、井本、森住、山口)がソマリアへ渡って実習を行い、うち2名(五十嵐、執印)は、大学を休学して1年間行くつもりです。そして、夏季に3名(船川、押木、石塚)が、ソマリアへ渡る予定です。

僕たちが目指す目標は、農業という土に根ざした活動を通して、世界中の飢えたり、恵まれない境遇にある人達の生活が少しでもよくなるようにすることです。そして、異国の地の、その文化・習慣・価値観を僕らの肌で学びとることです。現在は何とはなしに、10名ほどの人間が集まって来ましたが、これから、JASTとしてやってゆく上で、何よりも個性を大切に、画一化された人間になってゆくの

避けるために、規則は必要最少限に止め、創造力を持つ組織にしたいと思っています。また、多くのボランティア団体と横のつながりをできる限り持ち、東京中心の、こういった活動が、日本の規模で行われてゆくための力になろうと思っています。

今のメンバーそれぞれが、日本中の、それぞれの地で、海外協力の問題に関心を寄せ、それぞれの問題意識を持って、東京農業大学という大学に集まって来ました。そして、今、JVCの下で、実際に動こうとしています。現段階では、まだ何の力も持ってはいませんが、おまかせ下さい! これから一所懸命がんばります。この覧をお読みになった読者の皆様、よろしかったら、御意見を、是非とも聞かせて下さい。そして、よかったら、一緒にがんばってみませんか? 来るべき僕らの時代のためにも。

最近よんだ本

ぼくたち自身の自由や人間化の実践に根ざしていない「飢餓キャンペーン」は、ぼくたち自身をもアフリカの人たちをも同時に疎外し非人間化してしまうだろう。

この本は「アフリカ飢餓キャンペーン」に代表される日本人のアフリカに対する無知や理解のなさをすどく突く、告発の書である。ブームに流され易い日本人の中であって、反「飢餓キャンペーン」の立場に立った数少ない書。著者は、パウロ・フレイレの名著「被抑圧者の教育学」(亜紀書房)の訳者で、一貫して、第三世界の抑圧される人びとの側に立って発言してきている。

冒頭「アフリカの飢えと日本」と題された第I章では、飢えの構造にふれるとともに、その構造と私たち日本人とのつながりを徹底して見据えていこうとしている。死の淵にある人びとを救うのは当然の行為としながらも、日本の飢餓キャンペーンが「あたりまえのアフリカ」理解を妨げたり、アフリカの飢餓の原因の一端を日本人が担っていることを「善意の行動」が被い隠してしまうことを批判している。「アフリカの飢餓が世界(史)的な経済や政治の構造の産物でもあり、ぼくたちの社会の生産・分配・消費のあり方、ぼくたち一人ひとりの仕事やメシの食べ方とかかわり合っている問題が、あい

まいにされている。」こう批判する著者は、南アのバンツースタン^注で起きている飢餓や飢餓キャンペーンが一切とり上げていない事実を指摘する。それは、飢餓の原因が南アの白人政権による「アパルトヘイト(人種隔離)政策」にあり、南アの飢餓について語ることは南ア政府の批判につながり、ひいては南アとの関係で潤っている私たち自身の生活をも見直さざるを得なくなるからだと言う。

続くII章、III章のこの本のほとんどは、アパルトヘイトについて書かれている。とりわけ、日本=「ぼくたち」との関わりにその多くがさかされている。異常な飢餓キャンペーンの高まりのかけで、顧みられることのない「アパルトヘイト難民」の抑圧と飢餓。著者の憤りと亡命難民への共感がこの本の原動力となっている。

そして著者は、飢餓とアパルトヘイトの解決のために「問われているのは、ぼくたちの生産や仕事のあり方や、分配のあり方であり、ぼくたち一人ひとりの暮らしのあり方と生き方なのだ。」と主張する。「日本の子どもたちの自分死とアフリカの子どもたちの餓死のあいだには、何があるのか。この同時代の二つの悲惨な死の克服は、同時なのだ」とぼくは考えている」著者の眼に映る二つの死は同根のものだった。

注) 黒人居留地

(田島)

『アフリカの飢えとアパルトヘイト』

私たちにとってのアフリカ

楠原彰 著

亜紀書房 一五〇〇円

JVCプロジェクト

1985年8月25日 現在

☆個人の方からの寄付につきましては、月ごとに集計を出し、裏表紙に掲載しております。
個々の方のお名前は半年ごとに一括してご報告いたしております。

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会～毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介（代表）</p> <p>星野昌子（事務局長）</p> <p>熊岡路矢、鶴田三芳</p> <p>佐々木志保、荻野美智子</p> <p>前川昌代、高塚政生</p> <p>柴田久史、田島 誠他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>東京、埼玉、神奈川、千葉、山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。昨年10月より神奈川県大和市に開校した日本語教室は、7月中旬で第3期を終えた。現在は第Ⅰ～Ⅲ期の反省と今後の展望のために休んでいる。最近ではインドシナ以外のイラン、アフガニスタンからの難民が入ってくるので、どのような現状であるのか調査中である。機関誌の『そんぼんと』（クメール語で“手紙”の意）を毎月発行している。</p>	<p>禅林寺</p> <p>UNHCR</p> <p>(財)アジア福祉教育財団、難民事業本部</p>	<p>森山久寿子</p> <p>地区別連絡係11人</p> <p>他約70人</p>
	*バザー、ハンディクラフト販売		関 田鶴子 他約20人
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進</p> <p>現在活動している農場32haのうち約20haの農場より収穫を得た。ユニット4(20ha)の建設開始。</p> <p>●補助給食 / 基礎医療</p> <p>マグドーでもコレラが発生したため補助給食を一時中止し、コレラ予防のための衛生指導を行った。</p>	<p>UNHCR</p> <p>レフュジーズ・インターナショナル</p> <p>朝日新聞厚生文化事業団</p> <p>仏国土をつくろう会</p> <p>創価学会</p> <p>ジャパン・タイムズ</p> <p>九段ライオンズクラブ</p> <p>秋田大学「アフリカ難民を助ける会」</p>	<p>税田芳三(ソマリア事務所長)、山口誠史、掛村 均</p> <p>高橋一馬、米澤 聡</p> <p>久保祐輔、柿原建三</p> <p>千田悦子</p> <p>モハメッド・アデン・モハメッド、シャッド・モハメッド・ムザール、ラジッド・モハメッド・ランジャイル、サディック・モハメッド・アリ、モハメッド・ハジ・ヌール</p> <p>嶋 紀晶、樫田秀樹</p> <p>角田正恵、石井弘代</p> <p>現地スタッフ25人</p>
エチオピア アジバール (ウォロ州)	<p>●緊急医療 / 治療のための給食</p> <p>入院患者数 約200人</p> <p>外来患者数 150～250人</p> <p>ヘルスアシスタントが外来、入院患者に対して衛生教育を行っている。またヘルスワーカーには日本人スタッフが医療講習を行っている。</p> <p>アジバール村で巡回診療を開始した。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団</p> <p>立正佼成会</p> <p>神奈川県</p>	<p>仲佐 保、吉野 浄</p> <p>林 達雄、鈴木妙子</p> <p>太田律子、工藤美英子</p> <p>福村州馬、加納 妙</p> <p>内山田 康、現地スタッフ約95人</p>

活動地区	活動内容	出資団体	担当者
バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語)発行	全国社会福祉協議会 一般寄付	佐藤正喜(バンコク事務所長), 本橋 栄 ボンビモン・チャイブーン 原園秀子, 中山清秋 カモン・ミンムアン 他約10人
カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 自転車, 牛車, モーターバイク, 自動車, 水ポンプ, 発電機の整備技術を習得する。現在は新校舎にて開校。8月8日に新規生800人修了予定。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	トンディー・ソムカネ 古西 勇 ソムヨット・ラタナタム 熊木政江
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民村)	●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による, 難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。 バンブー村, サイト2, サイト6にて活動中, 活動対象者は4651人。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区医療部会, 城西病院 西本願寺 結城青年会議所	クリアクライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン ヴィジョン
	●補助給食 4月に入り, 難民の強制移動が実施され, JVCの活動地はサイト2(旧ノンチャン村より北に約50kmの国境沿い避難地)に移り, 4月15日よりそこでドライバックを, 病院, MCH(母子保護施設)へは食事の配給を開始した。	WFP/UNBRO	武田長久, 浜野敏子 トンチャイ・クラタルムボン 蓮尾慶治 プレムチット・スリホン カヌエンニット・ソーンマユラ マーシャ・イシイ
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション 本年度から日本語学校は閉校となり, 以下の活動に変更となる。 ①日本語の日常会話の習得 ②日本に関する概略的な情報伝達 ③日本へ行くまでの手続き等の理解を深める	天理教千葉	浜崎妙子 ティアン・パントゥー
地域開発 (仮称)	●バンコク市内のスラム地区 奨学金援助: スラム地区定住児童のための学費援助 図書館: 6区にあるバンコク市の青少年センターの一角を借り受け活動を開始した 建材提供: スラム立ち退き者, あるいはスラム内に保育所等を建設する際の物資援助	モラロジMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	ヴェラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也 ウィティバン・ラタナタリー 勝俣江美
人材派遣プロジェクト			
シンガポール (ホーキンスロード・キャンプ)	●UNHCR-ベトナム難民キャンプでの管理・運営	日本YMCA同盟 アジアキリスト 教会議	ニール・リー
フィリピン (パターン・プロセス シング・センター)	●国際移民委員会(ICM)-第三国定住手続きにともなう医療業務	城西病院	青井千恵

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

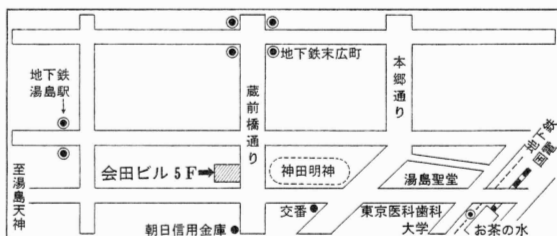
▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- インドシナ難民救援募金(8月小計 10,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- クロントイ・スラム募金(8月小計 0円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- テック・スラム奨学金(8月小計 10,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- アフリカ難民救援募金(8月小計 315,715円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- 日本語家庭教師募金(8月小計 5,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- 医療募金(8月小計 10,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- ボランティア募金(8月小計 5,004円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- JVC運営経費募金(8月小計 25,500円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- 無指定募金(8月小計 201,635円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
加入者名-JVC東京事務所

編集後記

▶朝日新聞に「ハッピー・ニッポン」という記事が連載されている。9月5日の朝刊では「世界を知る必要ないさ」というタイトルで最近の日本人の唯我独尊ぶりについていた。海外旅行熱は相変わらずだし、アフリカに対する関心も今までになく高いのだが、やはり外は外と、他人事なのだろうか。いろいろ関心を持った人も最後にはこういう。「やっぱり日本っていい国ね」。私たちは平和で食糧に満ち、宗教戦争など思いもよらない所に生きている。よその「かわいそうな人々」に時々同情はするがたいてい忘れていく。難民も「特別な人々」の域を出ない。もっと普通に「よその人々」とつきあえないものだろうか。(前)



昭和60年9月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 Telex:2323187 JVC HQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND

67 South Sathorn Road

Bangkok, THAILAND

☎(286)4857

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadish, SOMALIA

Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA

c/o Japan Embassy P.O.Box5650

Addis Ababa, ETHIOPIA

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 300円